

# 世界選手権の頃

実行委員長

荻村 伊智朗

西高の三年の冬の頃から私は武蔵野卓球場（上原氏夫妻の経営）に通うようになり、専大のOB天野さんの「力の卓球」の影響を少し受けた。クロス打ちのはじめの数本がラケットの上端に当たってしまった、あのボールの伸びは今も印象に残る。大学一年のときにスポンジに変り、前人未踏の技術領域に踏みこんだ。自立という意味で絶好の機会であった。誰にも教えてもらえない世界をだれでも本来もっているはずである。なまじ指導者がいると、その世界をのぞく機会を失うときがある。土壇場では誰もお前を助けてはくれないと人が本当に思えるようになるのは何回も甘さゆえの挫折を味わってからである。そうした心境を根底にもつということと人の好意を拒まないということとは矛盾しない。大学一、二年を通じて、他人の意識的無意識的の働きかけに応じながらも自分の道を保つ、自分の道を見失わない、これは難しい事業だった。なんとかやれたと思う。大学から駒沢、多摩川堤、自由ヶ丘、と走るのが日課。鏡に向ってのシャドープレイ、ベンチを台の向うに立てかけてのサーブス練習。カットサーブスだと返ってこないのでロングサーブスになる。ラリーは壁に向かって反射神経と、フットワークにはめっぽうよい。私がぐんぐん強くなったのは日大に移ってからだが、基礎的な力はほとんど西高と都立大時代についていた。基礎的な力さえ豊かにあれば、新しい刺激をどんどん消化できる。都立大の二年のときに、はじめて世界選手権の存在を意識した。それまでは、自分がやれる限りの卓球とはどんなものか、を求めていただけ。世界選手権だけでなく、日本選手権の軟式も硬式も初出場で優勝したが、自分が他をしらないということは他も自分をしらない、ということであった。こちらが他に類がなければ、

それだけ相手の驚きが多いのである。ただ、日英大会のバークマンだけは印象に残った。この「ミスは絶対にしない男」を破らねばならない。まず、当方もミスをしなくなった。だが、それだけでは互角にしかすぎない。あとは攻撃力である。スマッシュを打つ前に完全に相手に背中をみせる。腰の捻りと腰の切れ、これはパワーの源泉である。からだのバネと動きの切れには世界一の自負があった。リーチには立ち上り七本のノータッチをとった。今日のスポーツには観衆も参加している。一万六千の観衆が日本選手のミスならサーブミスにでも手をたたき、足を踏み鳴らすのにはキョトンとした。54年のロンドン世界選手権にはじめて参加したときのことだ。日本の歴史を自分はしらなくても背負われている、と理解させられた。古代ギリシャから第二次世界大戦までの戦争や政治の勝敗は、同じ世界観の者の間の優勝劣敗であった。口実が違うだけだ。戦争は血を流す政治であり、政治は血を流さない戦争だというが、いまの政治は世界観の異なる者の間の優勝劣敗である。スポーツと政治のかかわり合いは私の世界選手権初登場からすでに鮮烈であった。53年にはエリザベス女王の戴冠式があり、皇太子殿下が天皇の名代として参加されたが、イギリスの二つの有力紙が「日本の皇太子にハダシで線路工夫をやらせろ」とインドシナの報復を社説で唱えた。私は先日皇太子がその新聞の名を覚えておられるのをしった。ロンドン大会はその翌年だった。私の最後の優勝は61年、北京大会での混合だった。現在でこそ百七ヶ国と国交を樹立した中国だが、ダレスのドミノ理論も健在なころ、スポーツに突破口を見出す怨念にも似た観衆のエネルギーにロンドンを想い起した。そういえば、ロンドンの帰途、西高の先生をローマで想い出した。まだ日本人がヨーロッパへほとんどいけないころのことだ。あまり知らない自分がみるより、歴史地図を次から次と空でサラサラと黒板に書くあの先生（空っ風が吹いたときに体育館のベニヤ壁に水をぶっかけた俺達をからかったあの先生）の方がここを見るのにふさわしいのに、とふと思った。